

平成 30 年度 冬休み明け校長講話

※寒い体育館での全校集会ですので、講話は簡潔にして、下記の文章でその補足をしています。

皆さん、あけましておめでとうございます。新年を迎え、その節目に今年目標等をあらためて設定した人もいるかと思います。1 年の中にも節目はたくさんありますが、やはりお正月は特別だと思います。その折に考え思いいたしたことをもう一度確認して今年のスタートを切ってみてください。

さて、二十四節季、七十二候の特徴を玄関ホールのホワイトボードに書いてもらっていますが、皆さんはそれをきちんと見ていますか。国語科巢山先生に書いていただいているものです。昨年末、十干十二支についてでしたね（文末に画像あり）。

今日はそれをもとにした話をしてみます。まず 十干の方ですが、下の表のようになっています。古代中国には陰陽五行思想というものがあり、それで世界の成り立ちや現象を理解しようとしていました。「木は燃えて火となり、その火は灰（土）になり、その土が集まって鉱物（金）が産出され、その金はいつか腐食して水に返り、水は木を成長させる」と考えていたのです。つまり「木、火、土、金、水」がこの世界の基本原理なのです。その「木、火、土、金、水」をさらに「兄（え）」と「弟（と）」に分けました。木の兄（きのえ）、木の弟（きのと）、火の兄（ひのえ）、火の弟（ひのと）…と 10 分類します。表にまとめると下のようになります。これが十干です。

五行	兄・弟	組み合わせ	読み方	一文字表記	一文字の読み
木	兄	木の兄	きのえ	甲	こう
	弟	木の弟	きのと	乙	おつ
火	兄	火の兄	ひのえ	丙	へい
	弟	火の弟	ひのと	丁	てい
土	兄	土の兄	つちのえ	戊	ぼ
	弟	土の弟	つちのと	己	き
金	兄	金の兄	かのえ	庚	こう
	弟	金の弟	かのと	辛	しん
水	兄	水の兄	みずのえ	壬	じん
	弟	水の弟	みずのと	癸	き

さて、十二支の方です。こちらは十干より古い起源を持つようで、中国の殷の時代から使われているようです。現在、12 時間で半日、24 時間で一日と時間を割り振っていますし、12 ヶ月で一年が回るとされているように、時間の概念と 12 という数字は大昔から関係性が高かったようです。また、方角を表す際にも 12 方位が使われていました。家を立てる時、丑寅すなわち北東は鬼門とされているので、玄関やトイレ・台所などの水を使う部屋は作ってはならないとされているようです。

その 12 に割り振られた漢字とその読み、時間と方角をまとめたものが次の表のようになります。時代劇で丑三つ時といえ、午前 1 時から午前 3 時までを 4 等分した 3 つ目、

つまり午前 2 時から 2 時半までの時間帯を表すと言われています。

漢字	読み 1	動物	読み 2	時間	方角 1	方角 2
子	し	鼠 (ネズミ)	ね	午前 0 時前後	北	北
丑	ちゅう	牛 (ウシ)	うし	午前 2 時前後	北北東	北東
寅	いん	虎 (トラ)	とら	午前 4 時前後	東北東	
卯	ぼう	兎 (ウサギ)	う	午前 6 時前後	東	東
辰	しん	竜 (タツ・りゅう)	たつ	午前 8 時前後	東南東	南東
巳	し	蛇 (ヘビ)	み	午前 10 時前後	南南東	
午	ご	馬 (ウマ)	うま	午後 0 時前後	南	南
未	び	羊 (ヒツジ)	ひつじ	午後 2 時前後	南南西	南西
申	しん	猿 (サル)	さる	午後 4 時前後	西南西	
酉	ゆう	鶏 (トリ)	とり	午後 6 時前後	西	西
戌	じゅつ	犬 (イヌ)	いぬ	午後 8 時前後	西北西	北西
亥	がい	猪 (イノシシ)	い	午後 10 時前後	北北西	

元号が使われる以前、この十干と十二支を組み合わせて「年」を表していました。まず十干の最初である「甲」と十二支の最初である「子」を組み合わせて「甲子 (きのえね)」とします。次の年は「乙」と「丑」で「きのとうし」、さらに「丙」と「寅」を合わせて「丙寅 (ひのえとら)」、このように十干と十二支を組み合わせていくと、10 年目は「癸」と「酉」で「癸酉 (みずのととり)」となり、11 年目には十干は最初に戻るので「甲戌 (きのえいぬ)」となります。10 と 12 の最小公倍数は 60 ですので、この組み合わせ方で 60 年を表すことができます。このように 60 年一区切りで暦が巡っていくことを還暦といいます。60 歳の人たちが赤いちゃんちゃんこを着てお祝いをするのは、生まれて 60 年経って暦が一周し、再び赤子 (赤ちゃん) に戻るという意味があるからなのです。

1868 年、明治維新が成し遂げられましたが、その時の官軍対旧幕軍の戦いを戊辰戦争と言います。これはその年が戊辰だったからです。ちなみに大正 13 年は西暦でいうと 1924 年で、六十干支では一番初めに来る甲子の年となっています。もうわかりますよね？甲子園球場ができた年です。甲子園球場のネーミングはここからきているのです。ちなみに今年は己亥ですが、現在では、後ろの亥 (いのしし) だけが強調されるようになってしまっています。

さて、実はここからが本題です。60 の組み合わせ中、57 番目は庚申 (かのえさる) の年です。音読みではこうしん。この庚申を使った地名が南木曾町の中にあるのです。誰もが知っている妻籠宿の少し奥、つまり馬籠宿に向かったところに大妻籠という地籍があるのですが、そこに庚申塚という塚があるのです。私はこの名前を聞いて、この塚は江戸時代に一里、約 4 km ごとに目印として作られた盛土のことだと思いました。西暦 1620 年が庚申の年に当たりますので、江戸時代初期ということで時代的にも合います。自分の頭の中で、ほぼコンプリートされていました。

ところが、ちょっと調べてみたら、私の思い違いではないかと思われてきました。どうやら庚申塔というものを塚の上に立てたから庚申塚というようなのです。では庚申塔とは

何か。これもネットでちょっと当たってみました。中国の道教を起源とする庚申信仰からきているらしい。ある書には、このように解説されていました。『人中に潜む「三尸の虫（上尸＝頭、中尸＝腹、下尸＝足）」は、庚申の夜、人が眠りにつくと天に昇り、天帝にその罪を告げ、天帝は罪の軽重に応じて、その人の寿命を決めていくといわれる。そこで、長生きを願う人々は、この日は眠らずに夜籠して身を慎んだという』と。

私の仮説は脆くも簡単に崩れ去りました。しかし、庚申塚、庚申塔から庚申信仰というものにたどり着けました。次の課題は、大妻籠の庚申塚が庚申信仰と本当に関係あったのか、あったとするならばなぜその場所だったのか、あるいはその場所以外にも庚申塔、庚申塚はあったのか、その辺りは現地に足を運んで聞き取り調査を含めて詳細に調べてみたいといけません。そして新たな仮説を立てて検証してみようと思います。

なぜこんな話をしたのかと言いますと、学校や教科書から学んだ知識だけでなく、それを身近な地域素材と関連させることで、より深い学びに到達できると実感したからです。昨年末、3年生の皆さんに発表してもらった総合研究ですが、「地域」をテーマに様々な角度から考察されていました。それに私も刺激を受け、今年の研究テーマを決めました。これから仕事の合間を縫って現地にも出かけてみようと思います。

1・2年生の皆さん、早晚、自身の研究テーマを決めなければなりませんが、自分をわくわくさせてくれるようなテーマは身近なところに転がっていると思います。注意深く一日一日を過ごすようにしてみましよう。

